

《古事記》中卷之女性人物形象

—以富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后為中心—

鄭家瑜*

摘要

本論文是《古事記》之女性人物形象的第二篇。承接第一篇「《古事記》上卷之女性人物形象」**的研究成果，本論文主要探討《古事記》中卷的女性人物形象。

在《古事記》中卷的女性人物當中，皇后人物不單是天皇的「配偶」而已，她們在故事中扮演著重要的角色，並且對於《古事記》故事結構的發展以及延伸，具有重大的影響力。因此，本論文要從《古事記》中卷的女性當中，首先針對富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后這三位皇后來做考察。透過分析故事中所描述有關三位皇后的言行、舉止、反應、容貌、風度等等的內容，來解析該人物於故事中所呈現的性格、機能以及造型等問題。

透過上述的方法，筆者發現：《古事記》中卷出現的這三位皇后的形象，雖各自有特色，卻同時擁有堅強的意志和勇氣、主動守護男性，具有巫女以及慈母性格的女性，成為男性們在治理天下時的重要支持力量。再者，透過《古事記》《日本書紀》兩書的比較，筆者也發現：《古事記》的敘述方式非常具有文藝性，對於女性人物之「人情味」多有強調。

透過本論文的考察，筆者不但觀察出三位皇后的形象當中，呈現出《古事記》想要強調的「理想的皇后形象」之外，也更清楚掌握《古事記》中的天皇統治的原理以及《古事記》編撰的態度。

關鍵字：《古事記》、女性人物形象、富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后、形象、皇后

*國立政治大學日文系・專任助理教授

**鄭家瑜、「『古事記』上卷に見られる女性像」、『政大日本研究』第五号、2008、139-170。

『古事記』中巻に見られる女性像

—富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后を中心に—

鄭家瑜*

要旨

本稿は『古事記』における女性像を考察する作業の第二部である。前稿「『古事記』上巻に見られる女性像」**を踏襲し、本稿では、『古事記』の中巻を中心に読み解く。

『古事記』中巻に登場した女性の中で、皇后たちは非常に活躍しており、それぞれが登場する物語において重要な働きをしている。彼女達は、単なる天皇の配偶者ではなく、『古事記』の物語の発展にも重要な関わりを持っているのである。そこで、本稿では、まず『古事記』中巻に見られる女性の用例から、富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后、この三人の皇后を取り上げ、三人の皇后の言動、発話内容、遭遇した出来事に対する反応、その容貌などを分析し、その造形および『古事記』での役割における問題を考えてみた。

このような考察によって、富登多々良伊須々岐比売命は神子として、沙本毘売は情の深い女性として、神功皇后は有能の軍事家・政治家として、三人の皇后の形象には各自の特殊性が認められた。しかし三人の皇后には一貫して、強い意志と勇気を持ち、能動的に周りにいる男性を守ろうとする、巫女的かつ慈母的性格を持つ女性の姿が表現されていることがわかった。

さらに、この三人の皇后の形象を『日本書紀』に照らしてみれば、『古事記』の記述は非常に文芸的で、女性達の「人間味」が強調されており、三人の皇后を男性達の「治天下」の事業を支えていた人物として描かれていることも分かった。このことから、『古事記』中巻に登場した三人の皇后は当時において理想的な皇后像を示したという意義が読み取れ、その形象を通じて天皇統治の原理を一段と強調しようとする『古事記』編纂の態度や「『古事記』の作品的性格」を一層明らかにすることができたといえよう。

キーワード：古事記、女性像、富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后、形象、皇后

*国立政治大学日本語文学科・助理教授

**拙稿、「『古事記』上巻に見られる女性像」、『政大日本研究』第五号、2008、139-170。

Images of Female Characters in the “Kojiki” Volume 2

-Take Hototataraisusukihimenomikoto, Sahobime, Zinnguukougou for Examples -

Chia-yu Cheng*

Abstract

This paper is the second part of “Images of Female Characters in the Kojiki”, and, based on the result of part 1-- “Images of Female Characters in the Kojiki Volume 1”, for finding the images of female characters in the Kojiki Volume 2.

Queen, in the Kojiki Volume 2, is not only a spouse of Japan emperor, but also plays a critical role to influence story development or structure of the Kojiki. This paper will focus on Hototataraisusukihimenomikoto、Sahobime、Zinnguukougou in all female characters of the Kojiki Volume 2. By analyzing their words, behaviors, reactions, appearances, attitudes and so on, we will try to find out each one’s identity, function and style in stories.

According to the method mentioned above, we find the three queens in the Kojiki Volume 2, though look different, all own the same strong will, courage, positivity to protect man and the female characteristic combined mysteriousness of witch and motherhood, and are the main support for the male to rule. Furthermore, by comparing the Kojiki with the Nihonsyoki, we also find the Kojiki more rhetorical and emphatic on the human touch of the female.

From this paper, we have not only seen the “image of perfect queen” the Kojiki tried to show up, but also grasped the ruling principles of Japan emperor and the editing guidelines for the Kojiki.

Key word: Kojiki, image of female character, image, queen, Sahobime,
Zinnguukougou, Hototataraisusukihimenomikoto

* Assistant Professor, National Chengchi University Department of Japanese

『古事記』中巻に見られる女性像

—富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后を中心に—

鄭家瑜

1. はじめに

本稿は『古事記』（以下、「記」と略する）における女性像を考察する作業の第二弾として、中巻の女性像を中心に読み解くものである。

周知のように、『古事記』中巻には歴代の天皇の系譜を縦軸として、反乱物語、天皇の結婚、版図の拡大などのエピソードが織り込まれている。これらは『古事記』の説話世界の膨らみを増す効果だけではなく、天皇の治世の記録としても深い意義を持つ。なお、これらのエピソードでは天皇と次期天皇になる御子のほかに、皇后も非常に活躍している。たとえば、神武天皇の後である富登多々良伊須々岐比売命は、天皇の聖婚説話および当芸志美々命の反乱物語に登場している。また、垂仁天皇の後である沙本毘売は、兄の沙本毘古を助けて夫である天皇を暗殺しようとし、実際に反乱に参加した。そして仲哀天皇の後の息長帯日売命（以下、「神功皇后」と略す）は、熊襲出兵、新羅征伐、忍熊王の反乱などの事件に関わった仲哀記の中心人物である。

このように、『古事記』中巻に登場した皇后たちは、単なる天皇の配偶者ではなく、『古事記』の物語の発展にも重要な関わりを持っていることが認められるのである。したがって、本稿では、まず『古事記』中巻に登場する女性から、富登多々良伊須々岐比売命、沙本毘売、神功皇后という三人の皇后を取り上げて考察してみたい。そして、前稿「『古事記』上巻に見られる女性像」¹を踏襲し、三人の

¹ 拙稿「『古事記』に見られる女性像」、『政大日本研究』第五号、2008、139－170。

皇后をその言動、発話内容、遭遇した出来事に対する反応、言葉、容貌や態度などを通して、その形象の問題を考えたい。

さて、中巻の女性像の検討に入る前に、前稿の要点をまとめておきたい。前稿の考察結果によれば、『古事記』の上巻における女性はわれわれ人間と同様に、単一の性格ではなく、いくつかの側面を持っているが、それぞれの主な性格によって類別してみれば、地母神型、始祖型、巫女型、王女型の四つの類型が認められる。地母神型の女性は主に生命を生み出し、また死した生き物を呑み込み、そして再び生み出すという機能を持つ。伊耶那美命、大気都比売神がこの類型の代表である。始祖型の女性とは主に事物や系譜の由来を語る働きをするが、天照大御神は地上王権の由来や皇室の系譜を示す機能を持ち、皇室の始祖として語られるので、この類型の典型的な人物なのである。さらに巫女型の女性とは、主に呪術に長じている人物を言うが、天岩屋戸の前で笹の葉を持ち、神がかりながら胸を露出させて踊った天宇受売命はこの型に属している。最後に、王女型に関しては、「王女」とは地方や異界の統治者の娘を指しており、この型の女性は、自意識が高く、性格が強い一方で、夫の成功を達成させた存在という点が注目される。須勢理毘売、神阿多都比売と豊玉毘売がこの類型の女性として取り上げられる。また、この四つの類型の女性人物には、それぞれに特色があるが、高天原の至高性ならびに現世天皇の正統性を語ろうとする点において共通していることを前稿の考察によって明らかにした。

では、『古事記』の中巻に登場する三人の皇后は、果たしてどのような形象を持つのだろうか。それは上巻の女性像とは如何なる異同があるのだろうか。そして、それらの形象は各々の物語において、また『古事記』全書においてどのような意義と機能を持っているのだろうか。以下、各人物を『古事記』中に登場した順に考察していきたい。

2. 富登多々良伊須々岐比売命

まず、初代天皇一神武天皇の皇后、富登多々良伊須々岐比売命について考えてみたい。

『古事記』において、富登多々良伊須々岐比売命は長い神武天皇の東征譚の後に登場したが、それにまつわる話はおおよそ次の三つである。

- (1) 富登多々良伊須々岐比売命の誕生譚
- (2) 神武天皇の皇后の選定
- (3) 当芸志美々命の反逆と神沼河耳命の即位

次に、この三つの話を詳しく見てみたい。

2.1 富登多々良伊須々岐比売命の誕生譚

まずは、富登多々良伊須々岐比売命の誕生譚についてだが、原文は次の通りである。

三島湟咋之女、名勢夜陀多良比売。其容姿麗美故、美和之大物主神、見感而、其美人爲大便之時、化丹塗矢、自其爲大便之溝流下、突其美人之富登。爾、其美人、驚而、立走伊須須岐伎。乃、将来其矢、置於床辺、忽成麗壯夫。即娶其美人、生子名、謂富登多多良伊須須岐比売命。亦名、謂比売多多良伊須氣余理比売。【是者、悪其富登云事、後改名也。】故、是以謂神御子也。

この話は明らかに大物主神の神婚説話だが、この記述によれば、富登多々良伊須々岐比売命は、美和の大物主神と、三島湟咋の女の勢夜陀多良比売との間に生まれた子、いわゆる「神子」であることが分かる。

この神婚説話のヒロインである「せやだたらひめ勢夜陀多良比売」の名は、大物主神が丹塗矢と化してこの女と婚姻したという物語から作られたと

されている²。ただし、それと同時に、大物主神の神婚の対象であるという点から、彼女は神霊の寄り付く対象であり、「巫女的」な存在として見ることができよう。この点は、三輪山伝説における「活玉依毘売」³など、多くの神婚説話に登場した女性に通じていよう。

これに対して、富登多々良伊須々岐比売命の名についてはどうか。その名前にある「富登（女陰）」とは母が女陰を矢に刺された状態をいい、「伊須々岐」とは刺された母が驚いて急いで立走るという行為に由来する。そして「多々良」とは、母の名にある「陀多良」を負うものだとされている⁴のである。すなわち、富登多々良伊須々岐比売命という名は、母の神婚および名義に由来した部分が多いことが認められる。このことから、母の名を継承するとともに、富登多々良伊須々岐比売命は母の性格をも継承し、巫女性を持つことが想定できよう。

この富登多々良伊須々岐比売命の持つ巫女性は、「伊須気余理比売」という亦名からも示されている。その名前にある「余理比売」とは、玉依毘売の「よりひめ」の意に通じている。ここからも、「伊須気余理比売」は「神霊が加護し依り付く女」⁵で、

² 『新編日本古典文学全集 1—古事記』の頭注（p 157）では、「（夫）+ヤ（矢）+たた（立た）+ラ（接尾辞）、の構成で、夫の矢の立っているの意」とし、物語から作られた名としている。西郷信綱『古事記注釈第三巻』（p 85）では、「セヤはソヤ（征矢）への連想をもつ。ダタラがタタラでタチという語に関係ある。…セヤダタラヒメは矢の立った姫という意であり、つまり大物主神が丹塗矢と化してこの女に婚したという以下の話と、この名は照応する。」と述べている。

³ 松村武雄氏は、仁徳天皇紀四十年三月の條にある「故納其地赦死罪。是以號其地曰玉代」や万葉集における「家に来て、吾が屋を見れば、玉床之、外に向きけり、妹が木枕」（巻二）などの用例を取り上げ、「玉代」が「魂代」、「玉床」が「魂床」の意であると指摘し、「古文献が〈魂〉を表示するには殆ど常規的に〈玉〉の字を当てている」ことを説明している。さらに、「神の魂が憑り託くところの女性司霊者すなわち〈魂憑き姫〉を表わすに、記・紀がいづれも常に〈玉依姫〉を以てしている」と指摘している。氏の指摘からも、「玉依姫」とは「巫女」としての一般名だと理解できよう。【松村武雄、『日本神話の研究』第四巻、培風館、1958.6、262～265】

⁴ 富登多々良伊須々岐比売命の名義について、解釈は『新編日本古典文学全集 1—古事記』の頭注（p 157）に基づいたものである。

⁵ 『新編日本古典文学全集 1—古事記』の頭注（p157）によると、伊須気余理比売の「イは接頭語、スは助詞」であり、伊須気余理比売とは「神霊が加護し依り付く女」の意である。

巫女的な存在だと理解できよう。

このように、富登多々良伊須々岐比売命の出自と名義より、この女性が『古事記』では神子でありながらも、巫女的な存在として造形されていることが窺える。

2.2 神武天皇の皇后の選定

では、このような富登多々良伊須々岐比売命は果たして如何なる経緯で神武天皇の皇后になったのだろうか。

神武記では、次のような原文が記されている。

故、坐日向時、娶阿多之小椅君妹、名阿比良比売、生子、多芸志美美命。次、岐須美美命。二柱坐也。然、更求爲大后之美人時、大久米命白、此間有媛女。是謂神御子。

すなわち、神武天皇が日向にいたとき、既に阿多之小椅君妹を娶って子を二人生ませたにもかかわらず、なお皇后とするための美人を求めていたという。

「美人」という用語については、『古事記』には九例認められるが、このうちの七例は、神婚譚（邇々芸命の結婚一例、大物主神の結婚五例、肥長比売の結婚一例）に用いられ、二例は天皇（神武天皇、清寧天皇⁶）の聖婚に使われていたのである。このことから、「美人」という用語の使われ方はかなり限定的で、神婚譚と聖婚説話におけるヒロインの姿を描写する常套手段であることが分かる。さらに、天皇の聖婚説話の内面には古代の神婚譚を基盤としたものがあったとも考えられよう。

ただし、神武天皇の用例においては、富登多々良伊須々岐比売命はただ神婚譚と聖婚説話によく登場する「美人」だけの意義に止まらない。富登多々良伊須々岐比売命は大物主神を父としたが、大物

⁶ 清寧天皇の段における「袁祁命将婚之美人手。其娘子者、菟田首等之女、名大魚也。」という記述である。

主神はかつて河内王朝（天皇家）に倒された三輪王朝の主力である三輪氏の祭り神であり、三輪王朝の象徴と言える存在である⁷。すなわち、富登多々良伊須々岐比売命は旧勢力の象徴である大和の「国つ神」（大物主神）の子という身分を有しているのである。

神武天皇が既に阿多の小碕君の妹である阿比良比売を娶っていたにも関わらず、敢えて富登多々良伊須々岐比売を皇后として迎えたことについて、金井清一氏は「王権の核心の地がヤマトに定まったということが中巻の開始にとって不可欠の肝要事で」あり、「王権の中心の地は権力の根源の地であり、聖化された権威の地である。その地は日向ではダメなのである」⁸と述べた。氏の指摘した、「ヤマト」の持つ「聖化された権威の地」としての意義を考えれば、神武天皇が「治天下」の地を「ヤマト」に求めたことは物語上の必然性があるろう。さらに、この「ヤマト志向」を達成させるためには大和の旧勢力と結合しなければならない。そのような政治的な動きの中で、「婚姻による連結」は平和裏に旧勢力を吸収し、旧勢力の人心を慰撫する効果があるゆえに、旧勢力とを結びつけるには最もよき方法だと考えられたといえよう。

そして、「婚姻による連結」といった原理において考えれば、神武天皇が大和の旧勢力を象徴する大物主神の娘を娶る行動は、この「治天下」に繋がっているという意義があり、皇后選定説話の深層には「ヤマト志向」の意思が内包されていることが考えられよう。要するに、富登多々良伊須々岐比売命という女性は、大和王権を築き、

⁷ 大物主神の名義および歴史上の意義について、拙稿「『古事記』における大物主神伝説」（『台湾日本語文學報』第十七集、2002、219-232）で詳しい考察があるので、参照を願いたい。

⁸ 金井清一「『古事記』の成立・構成に関する論考 I—上・中・下巻の構成と意味」（『歴史読本』51巻12号、新人物往来社、2006、164）では、次のように述べている。

王権の核心の地がヤマトに定まったということが中巻の開始にとって不可欠の肝要事である。王権の中心の地は権力の根源の地であり、聖化された権威の地である。その地は日向ではダメなのである。何故ダメか。それは現王権がヤマトに所在するからである。ヤマトの現王権の権威を聖化して根拠づけるためには、現王権の主宰者「天皇」の淵源である「初代天皇」が現王権の所在するヤマトに王権の基を開いたということを事実として確定することが最大に有効なのである。

大和で天下を治めようとする神武天皇には不可欠なのである。このことから、富登多々良伊須々岐比売が初代皇后になれたのは、単に「美人」に関係するのではなく、大和の「土著の国つ神」⁹である「大物主神」の子という「神子」の性格にも深く関係していることが看取できよう。

さらに、富登多々良伊須々岐比売命は大物主神の「神子」であるため、「父神オホモノヌシの保有した国土のもの（精霊）どもを統括する靈威の継承」¹⁰をし、強大な呪術力を持っていることも想定できる。その呪術力は国中の騒ぎを鎮め、夫を支えていた力ともなるはずである。この点においては、『古事記』の上巻に登場する、強大な呪力で大國主神を支えていた須勢理比売を想起させよう。富登多々良伊須々岐比売命もまた、須勢理比売と同様に夫の栄達を成就する女性として考えられるのである。

ところで、須勢理比売のほかに、『古事記』における富登多々良伊須々岐比売命と神阿多都比売との類似性についても、既に西郷信綱氏によって指摘されている。氏は主に、①国つ神の娘、②天つ神の子たる王と婚し世継ぎを生む、この二点から指摘している¹¹。この二人の女性の類似点からも、邇々芸命の聖婚説話と神武天皇の聖婚説話は似たような構造を持っていると見られるのである。さらに、前者の聖婚が天から国（九州を中心とする国）へという地上王権の発生を示すものとして捉えられれば、後者の聖婚も、九州から大和へという大和王権の成立を示唆する働きをしているものとして把握できよう。このように考えると、神武天皇と富登多々良伊須々岐比売命との結婚は大和王権の確立には重要不可欠な要素なのだと理解してよかろう。

⁹ 西郷信綱『古事記注釈』第三巻、平凡社、1988、85。

¹⁰ 都倉義孝、「石之日売の嫉妬物語を読む一歌と物語の交渉一」、『古事記研究大系 9—古事記の歌』、高科書店、1994.2、106。

¹¹ 詳細は西郷、前掲注9書（p96）を参照願いたい。ただし、氏が指摘した二点のほかに、①神阿多都比売の夫と富登多々良伊須々岐比売命の夫が、それぞれに地上世界の統治を始めた天孫系の一人目と、系譜上の初代天皇であること、②二人の女性ともに「美人」として描写されていることの二点も類似点として加えることができよう。

以上のように、『古事記』における神武天皇の皇后選定の説話には、「ヤマト志向」の精神が存在しており、その精神は東征物語を一貫し、神武天皇の「治天下」とは密接不可分な関係を有することが察せられる。この点からも、皇后選定説話は東征物語の続きとして認められ、神武天皇后の巫女性および「大物主神」の子という「神子」の性格が神武記にのみならず、『古事記』中巻の物語の展開においても重要な意義を持つことが言えるのである。

2.3 当芸志美々命の反逆と神沼河耳命の即位

さて、この皇后は、当芸志美々命の反乱物語にも登場した。話は次のようである。

神武天皇の死後、神武天皇の庶子である当芸志美々命は、伊須気余理比売を皇后として迎え、伊須気余理比売の腹から生まれた三人の弟を殺そうとした。悲しみ憂えている中、皇后は「以歌令知其御子等」と、歌で皇子たちに危機を知らせた。それによって、子ども達に難を免れさせたという。

この話の中で、当芸志美々命が如何に反逆の陰謀を漏らしたのか、伊須々岐比売命が如何にこの秘事を察知したかは全く示されず、皇后が歌を詠み、三人の子にその事情を歌によって知らせたとのみ記されている。母から子へ危険を知らせるのは、母性愛による行動に違いないが、歌を通して秘事を告げるのは、一種の神の「お告げ」とも考えられよう。

崇神天皇の御世で建波邇安王が反逆を企んでいるとき、腰裳を着けた少女が歌でこの反逆のことを大毘古命に知らせたという話は周知のものだが、土橋寛氏『古代歌謡全注釈 古事記編』によれば、「これは普通の歌ではなく、神が少女の口を借りて建波邇安王の謀叛を知らせた歌として語られているのであろう」¹²という。すなわち、「歌」は「神託」の一つの手段と考えられるのである。この論理に従えば、問題とする伊須気余理比売の「知らせの歌」も神の「お

¹² 土橋寛、『古代歌謡全注釈 古事記編』、角川書店、1972、106。

告げ」として捉えてよかろう。

さて、伊須気余理比売の「お告げ」によって、当芸志美々命は陰謀が露見し、死の境地に追い込まれた。当芸志美々命は神武天皇の長子であったにも関わらず、伊須気余理比売の「お告げ」により、無残な死を迎えたのである。これに対して、伊須気余理比売の三人の子は、「お告げ」により、生き延びた。さらに、その中の一人である神沼河耳命は即位し、次期の天皇となった。ここにおいて、伊須気余理比売の「知らせ」を神の「お告げ」と考えれば、当芸志美々命の死は「神意による死」と見るべきであろう。それと同時に、神沼河耳命の即位もまた神の加護によるものだと理解できよう。

こうして、神の「お告げ」によって、反逆事件は無事に幕が下りた。伊須気余理比売の歌によって、皇子同士の殺し合いを免れたのである。このことから見れば、伊須気余理比売の持つ「神女」または「巫女」としての素質と働きは、天皇死後の政権の維持には極めて重要な意義を持っているといえるのである。

ほかに、当芸志美々命が三人の子を殺そうとしたとき、伊須気余理比売は「患苦」だとある。これは無論子を思う母の愛情と読み取れるが、伊須気余理比売の人間性が示されている箇所であり、そこに皇后の慈母としての形象が浮かび上がってくる。その慈母的形象もまた神武天皇の神々しい武勇という形象と相対的である。

これだけではない。神武記の冒頭に高木神が天神御子の神武天皇の「夢」で彼の前途に待ち受ける危険を告げたことが記されている¹³。

『古事記』に語られる「夢」はいずれも人の夢である¹⁴ため、神武天皇の夢は、神武の「人間」的な一面を示していよう。すなわち、

¹³ 『新編日本古典文学全集 1 - 古事記』の頭注(p 148)の解釈によれば、この段にある「覚白之」とは「夢による教示と解される」という。

¹⁴ 遠山一郎氏によれば、「『古事記』本文に語られる「夢」において、まず注意されるのは、夢を見るのが、天皇を含めて、すべて人である点である。中巻にも神々が多数登場するけれど、これら神々の見る夢は存在しない。他方、上巻には、少数の例外を除き、人が登場せず、神だけが活動する。この上巻には、夢がまったく語られていない。上巻に夢が見出されず、中巻の神々の夢が存在しない、という二点は、人だけが夢を見る、という一点に収束しつつ、『古事記』本文における夢の特徴のように見える。」という。【遠山一郎、「初代天皇像の構想」、『古事記研究大系 3 - 古事記の構想』、高科書店、1994、160】

『古事記』における神武天皇は異常誕生の要素や、天神の御子という身分によって保証される「神性」を有しながらも、人間的な一面が認められるのである。一方の富登多々良伊須々岐比売命は大物主神の娘でありながら、子達の身の安全を「患苦」する「人間性」を持つ女性なのである。この点においても、富登多々良伊須々岐比売命と神武天皇との相対的な関係は明らかである。以上のような相対的な関係を通して、神武天皇后は『古事記』においては、神武天皇に相応する配偶者としての造形が見出されるのである。

ところで、『古事記』と同じ時代に編纂された『日本書紀』（以下、「紀」と略する）にも神武天皇后の話が認められる。原文は以下の通りである。

庚申年秋八月癸丑朔戊辰、天皇当立正妃、改広求華胄。時有人奏之曰、事代主神共三嶋溝楸耳神之女玉櫛媛所生児、号曰媛蹈鞰五十鈴媛命。是国色之秀者。天皇悦之。九月壬午朔乙巳、納媛蹈鞰五十鈴媛命以為正妃。

この記述によれば、神武天皇后は「媛蹈鞰五十鈴媛命」という名を有し、「事代主神」と「三嶋溝楸耳神之女玉櫛媛」との間の子として生まれたと記されている。すなわち、『日本書紀』においても、皇后が「神子」および母譲りの巫女としての性格を有することが認められるのである¹⁵。しかし一方、『古事記』のように「霊の依る姫」といった意味（伊須気余理比売）を持つ亦名もなく、三輪山伝承による皇后の異常誕生も認められない。これらのことから、神武天皇后の神子的かつ巫女的な性格を強調しようとする意図が『古事記』にはあったことが想定できるのである。

さらに、紀には、皇后選定の過程についてもただ「庚申年秋八月癸

¹⁵ 玉櫛姫の「玉」は「玉依姫」の「玉」に通じているので、この女性もまた玉依姫と同じように巫女的な存在だと想定できよう。古文献における「玉」と「魂」との関連性および記・紀における「玉依姫」の名義について、詳細は松村、前掲注(3)書を参照願いたい。

丑朔戊辰、天皇当立正妃、改広求華胄。」という記述だけがある。これは、日向の姫を娶ったにもかかわらず大后を求めようとしたと意図的に記した『古事記』との間には相違が生じている。この相違からも、記に示されている「ヤマト志向」は紀には認められず、紀の記述からは天皇に対する皇后の重要性が示唆されていないように読み取れる。

また、天皇死後の当芸志美々命の反乱物語も『日本書紀』には記されていない。無論、皇后の人間性および慈母的なイメージも浮かび上がらない。

これらの点からも、『日本書紀』の神武天皇后の説話が非常に簡素であることが分かる。それと同時に、『古事記』における神武天皇后は、強い巫女性および神子的な性格を持ちながら、神武天皇と同様に人間性を有し、さらに、神武朝の政権建立および政権の安定に重要な役割を果たしている人物として造形されていることが看取できる。言い換えれば、神武天皇に相応する配偶者として描かれているのである。

3. 沙本毘売

つづいて、もう一人の皇后の話を見てみたい。垂仁天皇の後である沙本毘売である。沙本毘売に関わるのは、名高い沙本毘古・沙本毘売の反乱事件である。原文はやや長いですが、引いておく。

此天皇、以沙本毘売爲后之時、沙本毘売命之兄、沙本毘古王、問其伊呂妹曰、孰愛夫与兄歟、答曰、愛兄。爾、沙本毘古王謀曰、汝、寔思愛我者、将吾与汝治天下而、即作八塩折之紐小刀、授其妹曰、以此小刀刺殺天皇之寢。故、天皇、不知其之謀而、枕其后之御膝、爲御寢坐也。爾、其后、以紐小刀爲刺其天皇之御頸、三度举而、不忍哀情、不能刺頸而、泣淚、落溢於御面。乃天皇、驚起、問其后曰、吾見異夢。（中略）爾、天皇詔之、吾、殆見欺乎、乃興軍擊沙本毘古王之時、其王、作稻城以待戰。

此時、沙本毘売命、不得忍其兄、自後門逃出而、納其之稻城。此時、其后、妊身。於是、天皇、不忍其后懷妊、及愛重至于三年。故、迴其軍、不急攻迫。如此逗留之間、其所妊之御子既産。故、出其御子、置稻城外、令白天皇、若此御子矣、天皇之御子所思看者、可治賜。於是、天皇詔、雖怨其兄、猶不得忍愛其后。故、即有得后之心。（中略）爾、其后、予知其情、悉剃其髮、以髮覆其頭、亦、腐玉緒、三重纏手、且、以酒腐御衣、如全衣服。如此設備而、抱其御子、刺出城外。（中略）亦、天皇、命詔其后言、凡子名、必母名、何称是子之御名。爾、答白、今、当火燒稻城之時而、火中所生故、其御名、宜称本牟智和氣御子。又、命詔、何爲日足奉。答白、取御母、定大湯坐・若湯坐、宜日足奉。故、随其后白以、日足奉也。又、問其后曰、汝所堅之美豆能小佩者、誰解。答白、且波比古多々須美智宇斯王之女、名兄比売・弟比売、茲二女王、淨公民。故、宜使也。然、遂殺其沙本比古王。其伊呂妹、亦、從也。

粗筋は以下の通りである。

垂仁天皇の後である沙本毘売は、兄の沙本毘古に「夫と兄と孰れか愛しき」と聞かれ、「兄ぞ愛しき」と答えた。すると、沙本毘古は謀叛の企みを語り、妹に天皇を暗殺させようとした。だが、沙本毘売は、夫に少なからぬ愛情を抱いているために、暗殺を果たせない。そして、反逆の計画が天皇に知られてしまい、天皇はたちまちに軍を興して、沙本毘古を討ちに向かわせた。垂仁の軍隊に攻め滅ぼされようとする兄を忍びがたく、沙本毘売は妊娠したまま、兄のいる稲城に逃げ込んだ。それを知り、天皇は后を奪い返そうとするが、沙本毘売の固い決心によって奪還は失敗に終わった。そして、火が稲城を燃やし始めた時、その火中で天皇の御子が生まれた。沙本毘売は御子を「本牟遅和氣王」と名づけて天皇に託し、自分の代わりとして丹波の王女を推挙した後、沙本毘古に殉じたという。

この話の主人公は、沙本毘売、沙本毘古、垂仁天皇の三人である。

沙本毘売と沙本毘古は同母兄妹だが、その兄妹関係を超えて、不義の子まで生んだという近親相姦の関係と捉えている説がある¹⁶。しかし、沙本毘売は兄に渡された刀を三度挙げて「不忍哀情」で、夫天皇を殺すことができず、さらに沙本毘売は稲城で敢えて天皇に御子を差し出したことから、ヒロインの沙本毘売は天皇に対しては深い愛情を持ち、本牟遲和氣王は沙本毘売と夫天皇との愛の結晶と見るのが、正しい理解であろう。

にもかかわらず、沙本毘売は「天皇を殺せ」という兄の頼みを断ることができなかつた。これは、何ゆえであろうか。この問題について、まず沙本毘売と沙本毘古の名義から見てみたい。

「沙本毘売」とはそもそも「サホ（佐保）」の姫であり、地方の名を負う名前である。古代では、地名の名を負うことは、当地の土地霊を負うものだと考えられていたが、この姫は佐保地方（大和国添上郡佐保）の勢力を代表する姫だと想定できる。これに対して、その兄の沙本毘古は沙本毘売とは一対の名で、佐保地方（大和国添上郡佐保）の勢力を代表する彦と考えてよかろう。『魏志倭人伝』の耶馬台国の卑弥呼とその男弟、『山城国風土記』の兄玉依彦と妹玉依姫を始めとして、記紀に伝える数々の同じ名を負う一対のヒメ・ヒコ制¹⁷とあるように、沙本毘古と沙本毘売もまた古代のヒメ・ヒコ制に因んだ名前だといえるのである。

ヒメ・ヒコ制とは、兄・妹、あるいは姉・弟の組み合わせであり、女はその兄弟を助けて国を治めるという古代日本における政治的・霊的な二重統治の方式であった。このような二重統治の方式は、古代日本において、主に地方豪族を中心に行われており、男の政治的職掌に対して、女は霊的職掌を割り振られる。言い換えれば、男は人民を管理するという「政」の面に関与し、女は神を祭るという「祭

¹⁶ 倉野憲司『古事記全註釈』第六卷（三省堂、1979）、浜田清次「沙本毘売の物語について」『日本文学研究』4号（1962）、また、三谷栄一「兄妹の恋—近親相姦からみた」『国文学解釈と鑑賞』515号（至文堂、1975）には、近親相姦という用語が用いられていないが、同じ趣旨のものだと察せられる。

¹⁷ 都倉義孝、「沙本毘売物語論」、『古事記—古代王権の語りの仕組み』、有精堂、1995、72。

り」の面に関与するのである。

だが、この話では沙本毘売が垂仁天皇に娶られたという。悲劇はここから始まったのであろう。なぜなら、ヒコとヒメとは、どちらかが欠けると、ヒメ・ヒコ制という二重統治の方式が維持できなくなるからである。言い換えれば、沙本毘売が垂仁天皇に娶られたことによって、佐保地方におけるヒメ・ヒコの統治方式が崩壊してしまったからである。沙本毘古の反乱は、ヒメを取り戻し、ヒメ・ヒコの二重統治の再興という願いから来たのであろう。こうした兄の願いに対して、沙本毘売はさすがに断れなかった。だが、夢を解くことは元来巫女の責務であった。そのために、夫天皇に夢の意味を問われた際に、皇后は「争はえじ」と直感し、夢の意味を解釈しなければならなくなり¹⁸、謀反事件が露見することで、自分も兄も窮地に立たされた。

天皇統治においては、「政」の主導権はともかく、「祭」の主導権も天皇の手になくってはならないが、沙本毘売は垂仁天皇の後で、一方はヒメ・ヒコ制におけるヒメなので、旧体制（ヒメ・ヒコ制）と、新体制（天皇制）とのジレンマになった。このジレンマから脱却する最終手段は「死ぬ」ことであろう。能澤壽彦氏は沙本毘売の死を、「サホビメはヒメヒコ制の旧世界原理へと殉じた」¹⁹と捉えているが、氏の見解は賛同できよう。

このように、沙本毘売の天皇暗殺の成否は、ヒメ・ヒコ制の存亡に深く関係しているにも関わらず、沙本毘売は天皇に深い愛情を持つため、暗殺行動は失敗に終わり、妊娠したまま、兄の籠った稲城に入った。さらに、自ら髪を剃り切り、玉の緒を腐らせ、夫天皇の

¹⁸ 山崎正之氏によれば、「夢解きの早さと正確さでいえば、サホビメは呪的能力にすぐれた女性であったことは確かであろう。…天皇の言葉に対して〈争はえじ〉と直感しているのであった、ここでいつわる気持ちはいささかもなかったことだけは明らかだ。」という。【山崎正之、「叛乱物語の一位相—サホビコ・サホビメ物語を中心に」、『国文学研究』第58集、1976。のちに『日本文学研究資料新集—1古事記 王権と語り』（土井清民編、有精堂、1986）所収】

¹⁹ 能澤壽彦、「ヒメヒコ制の原型と他界観」、『日本女性史再考 I—女と男の時空』（河野信子編、藤原書店、1995、145-177）ただし、氏はほかに沙本毘売物語の造形は「鎮魂の試みにかよう」とも論じたが、「鎮魂」に関係するかどうかについて、筆者は保留の態度を取りたい。

奪還工作を失敗させる。兄とともに死のうとする決意は固かったのだろう。その死の決意について、前城直子氏は「(天皇への)裏切りの償いは死ななければならぬという償罪のつぶやき」²⁰と指摘したが、そもそも暗殺の行動に失敗したのは、「三度挙而、不忍哀情、不能刺頸而」とあるように、夫に対する愛のためであり、罪意識のためではないと見てよかろう。そうすれば、姫の死の決意も「裏切りの償い」の問題ではなく、夫を愛すると同時に、兄をも愛するという心情から来たと読み取るべきではないか。

この点は記紀の比較を通して明白になろう。

『日本書紀』においては、謀反計画を隠しておくことができないと覚悟したとき、皇后は天皇に「妾不能違兄王之志。亦不得背天皇之恩。」といった。これに対して、天皇は「是非汝罪也。」と受け止めている。さらに、天皇がサホビコのいる稲城を手堅く攻めたときに、皇后は「妾始所以逃入兄城、若有因妾子、免兄罪乎。今不得免。乃知、妾有罪。何得面縛。自經而死耳。唯妾雖死之、敢勿忘天皇之恩。」と発言した。これらの記述からも、『日本書紀』における天皇と皇后との間の記述は「恩情関係」に重点があり、天皇の恩に背く「罪」の問題が『日本書紀』では大きく取り上げられていることが認められよう。この点は、「恩」と「罪」に関わることは一切記していない『古事記』とは大きく異なっていることが注目すべき点である。さらに、「恩」と「罪」との命題よりも、天皇と皇后との「愛」を強調しようとする意図が『古事記』にはあったことも認められるのである。

この点は丹波の王女の推挙の事件を通して窺える。

『古事記』では、「(天皇)問其后曰、汝所堅之美豆能小佩者、誰解。(皇后)答曰、且波比古多々須美智宇斯王之女、名兄比売・弟比売、茲二女王、淨公民。故、宜使也。」というように天皇と皇后との問答が記されている。すなわち、天皇の「所堅之美豆能小佩」²¹を解くた

²⁰ 前城直子、「古事記サホヒメ物語現存形の成立の背景(一)―記紀の比較を通して考察する」、『国史館短大紀要』第12巻、1987、1-31。

²¹ 『新編日本古典文学全集1―古事記』の頭注(p204)によれば、「古代には男女互いに下紐を結び交わして、また逢うまでは余人に解かせぬと契る風習が存在していた」という。

めに、皇后が丹波の王女を推挙したのである。この問答は、男女、または夫婦の間問答として受け止められる。これに対して、『日本書紀』では「唯妾雖死之、敢勿忘天皇之恩。願妾所掌后宫之事、宜授好仇。丹波国有五婦人、志並貞潔。是丹波道主王之女也。」とあるように、皇后は「天皇の恩」に報ずるため、自らの司っていた後宮のことについて、丹波の王女を推挙したという。ここにある皇后の行為は「一日も君なかるべけんや」と同じく、天皇を補佐する皇后の位も一日空いてはいけないという皇后としての責務に由来したものだといえよう。そして、皇后からの推挙に対して、天皇は「当納掖庭、以盈后宫之数。」とある。このような描写からも、天皇と皇后との間には「愛情関係」が希薄であるように読み取れる。

また、皇后が兄のいる稲城に出奔したことについて、記では「天皇詔之、吾、殆見欺乎、乃興軍擊沙本毘古王之時、其王、作稲城以待戰。此時、沙本毘売命、不得忍其兄、自後門逃出而、納其之稲城。」と、兄が攻め込まれる様子をヒメが堪えられない（「不得忍」）ことが記されている。すなわち、ヒメは兄に対しても深い肉親の愛を持っているような記し方である。これに対して、紀では、「吾雖皇后、既亡兄王、何以面目、莅天下耶」とあるように、兄への「愛」よりも自らの面目や天下のことなどを優先的に考慮していたサホビメの姿が覗える。

そして、『古事記』では、兄の安全を心配するために、ヒメが妊娠したまま、稲城に出奔したが、彼女の死ぬ前に、火の中で生んだ御子を夫天皇に渡し、子の名前をつけ、大湯坐・小湯坐を定めている。「命名権と養育権は古代信仰を背後に負う司霊者としての古代女性の重大な権力と義務とも言うべき意味が含まれる」²²とはいえども、死ぬ前でも母としての義務と責任を果たそうとしていたのは子への

「慈愛」とも見られよう。ここにおいては、皇后が「若有因妾子、免兄罪乎。」と考えたため、幼い御子を稲城に連れ込んだといった『日本書紀』のサホビメ像とは異質である。ここからも、記における沙本毘売には子に対する慈しみが窺えるが、一方の紀では、御子の安

²² 前城、前掲注 20 論文。

全を顧みず、幼い子の命を兄の命と取り替えさせようとした皇后の下心があり、子への「慈愛」が欠けているような記し方をしていると見られよう。

以上のような記紀の比較からも、『古事記』における沙本毘売は、受動的に兄の頼みを引き受けたが、苦渋の境地にいても、彼女は全身全霊を尽くし、能動的に愛する夫と兄を守ろうとしていた女性という形象を持っていると見られる。彼女は夫を暗殺しようとして一度裏切ったが、最終的には夫を危険から逃した。一方、暗殺事件が露呈したことで兄を裏切ったが、最終的には兄と死の運命をともにし、それによって、兄の悲願のヒメ・ヒコ制が死ぬ前に一度成就されたのである。また、子の命名と養育や、自らの後継者についても彼女は死ぬ前に全て決めておいた。妻であれ、妹であれ、母であれ、沙本毘売は様々な人間関係の中で、周りの人間に深い情をかけているが、女性としての道を迷わずに全うしようとした。この点からも、沙本毘売は、単に「苦悩」と「無力」の中に生きる女性ではなく、強い意志と勇気を持つ能動的な女性であることが認められよう。このように考えてくると、沙本毘売の話もまた単なる悲劇ではなく、「愛」と「勇気」が溢れた物語として捉えることが可能だと言えよう。

4. 神功皇后

最後に、神功皇后の話を見てみたい。

神功皇后は主に仲哀記に登場する。神功皇后にまつわる話が多いので、検討の便宜のため、次の五つにまとめ、さらに重点に下線を引いておく。

(一) 神の託宣と仲哀天皇の死

其太后息長帯日売命者、当時、^①帰神。故、天皇、坐筑紫之訶志比宮、将撃熊曾国之時、天皇、控御琴而、建内宿禰大臣、居於沙庭、請神之命。於是、^②太后帰神、言教覺詔者、西方有国。金・銀爲本、

目之炎耀、種々珍宝、多在其国。吾、今帰賜其国。爾、天皇答白、登高地見西方者、不見国土、唯有大海、謂爲詐神而、押退御琴、不控、默坐。爾、其神、大忿詔、凡、茲天下者、汝非忘知国。汝者、向一道。於是、建内宿禰大臣白、恐。我天皇、猶阿蘇婆勢其大御琴。爾、稍取依其御琴而、那摩那摩邇控坐。故、未幾久而、不聞御琴之音。即举火見者、既崩訖。

(二) 神功皇后の朝鮮半島出兵

故、備如教覺、整軍双船、度幸之時、^③海原之魚、不問大小悉負御船而渡。爾、順風、大起、御船、從浪。故、其御船之波瀾、押騰新羅之國、既到半國。於是、其國王畏惶奏言、自今以後、隨天皇命而、爲御馬甘、每年双船、不乾船腹、不乾柁楫、共与天地、無退仕奉。故、是以、新羅國者、定御馬甘、百濟國者、定渡屯家。爾、以其御杖、衝立新羅國主之門、即以墨江大神之荒御魂、爲國守神而、祭鎮、還渡也。

(三) 鎮懷石と御子の誕生

故、其政未竟之間、^④其懷妊臨産、即爲鎮御腹、取石以纏御裳之腰而、渡竺紫國、其御子者、阿礼坐。故、号其御子生地謂宇美也。

(四) 香坂王・忍熊王の反逆

於是、息長帶日売命、於倭還上之時、^⑤因疑人心、一具喪船、御子載其喪船、先、令言漏之御子既崩。如此上幸之時、香坂王・忍熊王、聞而、思將待取、進出斗賀野、爲宇氣比獵也。爾、香坂王、騰坐歷木而、大怒猪、出、掘其歷木、即咋食其香坂王。其弟忍熊王、不畏其態、興軍待向之時、赴喪船、將攻空船。(中略)^⑥建振熊命、權而令云、息長帶日売命者、既崩。故、無可更戰、即絶弓絃、欺陽帰服。於是、其將軍、既信詐、弭弓藏兵。爾、自頂髮中採出設弦、更張、追擊。故、逃退逢坂、対立、亦、戰。爾、追迫、敗於沙々那美、悉斬其軍。於是、其忍熊王与伊佐比宿禰、(中略)即、入海、共死也。

(五) 太子の易名と皇后の献酒

故、建内宿禰命、率其太子、爲將禊而、經歷淡海及若狹国之時、於高志前之角鹿造仮宮而、坐。爾、坐其地^⑦伊奢沙和氣大神之命、見於夜夢云、以吾名、欲易御子之御名。（中略）於是、還上坐時、^⑧其御祖息長帶日売命、釀待酒以獻。

さて、果たしてこれらの話で、神功皇后はどのように描かれているのか。以下は下線部を中心に考察し、神功皇后の形象の問題を考えたい。

まず、①と②についてだが、①は「帰神」で、②は「大后帰神」である。「帰神」とは、神に憑依された意味であることは言うまでもない。（一）の話はそもそも、皇后が「西国へ征討に出よ」という神託を受けた話だが、「帰神」や「大后帰神」などの表現を通して皇后の「巫女的性格」が明らかに表現されていよう。

しかし一方で天皇は、皇后が受けた「神託」について信じ切れないため、神罰にあたり、亡くなってしまう。この天皇に対して、皇后は素直に神の話を真実と見て神意に従い、西国へ渡ることにした。その途中で、③のように、海原の魚は大小を問わずに皇后の御船を背負って海を渡り、海中の波も風も御船を朝鮮へ運んでいった。この話について、「海の神の加護は、このような魚の働き・風の助けとなってあらわれた」²³と見なされているが、皇后は神の憑依によって、水や風を操ることができたというように読むこともできよう。

また、御子が生まれそうになるとき、皇后は④に描かれているように、石を取って御裳の腰につけてその腹を鎮めようとする。この石はのちに「鎮懐石」と呼ばれた。石を使い、御子を生む時間を延ばしたのは一種の呪術に違いないが、ここからも呪術を自由に操ることができるという皇后の一面が示唆されているのである。

それだけではない。⑧のように、神功皇后は外地から帰来した御子に献酒している。古代には「酒」は日常的な嗜好品のたぐいではなく、非日常的な液体として扱われていた。のみならず、人知を越

²³ 解釈は『新編日本古典文学全集 1—古事記』の頭注（p 247）による。

えた靈妙なる性能を秘めた奇しき液体でもあった²⁴。このような酒は、古来、「神酒」であり、神に献上するものであった。すなわち、神功皇后が外地から帰来した御子に献酒したことは、「外来神に献酒する巫女」というイメージを与えるものであろう。したがって、この話もまた神功皇后の巫女的性格を示す一環として存在していると考えられよう。

以上のように、『古事記』における神功皇后という人物について、その「巫女的性格」が強く描き出されていることをまず指摘できるのである。

ところが、神功皇后という人物の形象はこれに止まらない。仲哀天皇の死後、皇后は倭に帰り上る時に、香坂王・忍熊王の心が疑わしく思えたので、⑤のように、「御子は既に死んだ」と、噂を流して喪船を用意し、香坂王・忍熊王を計略にかけた。その計略によって、香坂王は死んだのである。この段では、知恵を練って謀略を図り、反逆者たちを消滅しようとした、謀略に長ずる政治家ならびに軍事家としての神功皇后像がみえよう。また、皇后側の将軍である建振熊命は⑥のように、皇后の死んだという噂を敵軍にわざと流し、それによって敵の軍隊を滅ぼしている。これは⑤に記されている皇后の謀略と軌を一にしたものだろう。したがって、⑥の事件も神功皇后の意志に深く関与していることが考えられよう。

要するに、皇后は二度も敵軍を欺いて、勝利を得たのである。「欺き」は、現代においては決して光栄なことではあるまいが、倭建命が女装によって出雲建を倒したように、古代文学で現れた「欺き」は必ずしも否定的なイメージではなく、場合によっては知恵の象徴とも見られる。この話では、神功皇后の「欺き」の行為が応神天皇の即位を成就させた重要不可欠な要素であるため、肯定的なイメージを持つものとして捉えてよかろう。

夫天皇の死後、国の政治権は大後の神功皇后の手に握られた。反乱が起こっても知恵を練って謀略を図り、迅速に反乱を平定し、国

²⁴ 相川宏、「常世攷」、『日本大学・芸術学部紀要』26号、1998、103。

中の平和を保つことができた。これらのことは決して並の女性ができるものではない。このようなことから、皇后は非常に有能な軍事家および政治家であることが分かる。

以上のように、『古事記』における神功皇后は政治的職掌と靈的職掌がその一身に集中しているという人物形象を持つことが窺えるのである。

また、皇后は夫の死後にも皇子を立派に育て上げ、懸命に御子をほかの皇位継承者の競争から守り、皇位に就かせている。この点からは、母性愛の満ちた皇后像が窺えよう。「<産む>母は、同時に<育てる>母でなければならないのである。そして、その二つがそろった時、母はまことの<聖母>となる。」²⁵とすれば、神功皇后は「聖母」としての素質を十分に持っていると言えよう。現に対馬には神功皇后・応神天皇という母子神信仰、御子信仰が存在しており、浅茅湾の竹敷（現美津島町）には神功皇后を祭神とした聖母神社がある²⁶。これらのことから、聖母としての形象が神功皇后という人物像における重要な要素であると見なせよう。

このように、『古事記』で描かれている神功皇后は、巫女的な性格が濃厚でありながら、政治に敏く、謀略に長じ、政治的リーダーシップを持ち、さらに御子のために戦う聖母の形象を持つ人物であることが分かる。

ところで、以上に挙げた神功皇后の説話は『日本書紀』にも見られる。だが、『日本書紀』の記述は『古事記』より遥かに詳細で、多くの紙幅が費やされている。たとえば、朝鮮征討については、『古事記』ではただ新羅国王の帰服および「新羅国者、定御馬甘、百济国者、定渡屯家」と記しただけであるが、『日本書紀』では「吾聞、東

²⁵ 三浦佑之、『万葉びとの「家族」誌一律令国家成立の衝撃』、講談社、1996、35。

²⁶ 対馬の神功皇后伝承は豊玉姫などを通じる母子信仰、御子信仰などと重層しつつ、中世の八幡愚童訓などにより各地に広まった。対馬を拠点として広がった神功皇后伝承について、詳細は吉田修作、「対馬の神功皇后伝承」（『福岡女学院大学大学院人文科学研究紀要』第四号、2007）、永留久恵、『海神と天神—対馬の風土と神々』（白水社、1998）に委ねたい。

有神国、謂日本。亦有聖王、謂天皇。必其国之神兵也。豈可拳兵以距乎。即素旆而自服、素組以面縛、封函籍、降於王船之前。因以叩頭之曰、從今以後、長与乾坤伏為飼部。其不乾船桅而春秋獻馬梳及馬鞭。復不煩海遠以每年貢男女之調。則重誓之曰、非東日更出西、且除阿利那礼河返以之逆流、及河石昇為星辰、而殊闕春秋之朝、怠廢梳・鞭之貢、天神地祇共討焉。」と長々と新羅王の帰服の誓言を記載している。さらに「時或曰、欲誅新羅王。於是皇后曰、初承神教、將授金銀之國、又号令三軍曰、勿殺自服。今既獲財國。亦人自降服。殺之不祥。乃解其縛為飼部、遂入其國中、封重宝府庫、收函籍・文書。即以皇后所杖矛、樹於新羅王門、為後葉之印。爰新羅王波沙寐錦即以微叱己知波珍干岐為質、仍齎金・銀・彩色及綾・羅・縑絹、載于八十艘船、令從官軍。是以新羅王常以八十船之調、貢于日本國、其是之緣也。」と、新羅王に対する神功皇后の対応、また新羅への管理についても細々と述べている。なお「於是高麗・百濟二國王聞新羅收函籍降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭而款曰、從今以後、永稱西蕃、不絕朝貢。故因以定官家。是所謂三韓也。」という記述もあり、高麗と百濟との二國王の動向および三韓の由来などについても物語っている。このように、神功皇后の朝鮮征討事件は『日本書紀』においては綿密に語られていることが分かる。

のみならず、『日本書紀』では神功皇后紀を設けており、神功皇后の功績を仲哀紀から独立させ、まとめる編纂の仕方となっている。これに対して、『古事記』では神功皇后記がなく、神功皇后の征韓事績が強調される傾向も窺えない。『古事記』における朝鮮征討の事件は香坂王・忍熊王の反逆と太子の易名・皇后の献酒などの話とは、バランスの取れた分量で記されている。ここにおいて、記紀の違いは明瞭である。この相違からも、『日本書紀』は、神功皇后の功績を高く評価しようとし、神功皇后を一人の「天皇」（あるいは「女王」というか）に準ずるような記し方をしていることが窺えよう。一方の『古事記』では神功皇后個人の功績に関する記述が非常に簡素であると同時に、応神天皇の母后としての働きが前面に出されているように読み取れる。

また、『日本書紀』では、仲哀天皇の熊襲征討に関しては詳細な記述があるが、『古事記』ではただ「天皇、坐筑紫之訶志比宮、将撃熊曾国之時」という一言で触れられているだけで、直ちに「凡、茲天下者、汝非応知国。汝者、向一道。」と天皇が神罰を受けてなくなったことが記されている。ここにおいて、『古事記』の仲哀天皇の存在は非常に影が薄く、「此国者、坐汝命御腹之御子所知国者也。」という太子（のちの応神天皇）の国家統治の正当性と必然性を強調するための人物として記されているように思わせる。

これらのことから、仲哀記の記述重点は仲哀天皇の功績にあらず、神功皇后の功績にもなく、太子（応神天皇）の出生、即位、また朝鮮半島を含む新世界の統治者としての正当性を強調する所にあると考えられよう。神功皇后の記事もこのような原理の中で、記載されているのである。いわば、神功皇后の記事も応神天皇の即位の「正当性」を強調する一環として『古事記』に位置づけられているといえるのである。このように考えると、記紀の神功皇后はともに、巫女的性格と政治的リーダーシップを持ち、さらに御子のために戦う聖母の形象を有する人物として描かれているが、『古事記』のそれが特に応神天皇の即位を成就する人物としての意義が付与されていると看取できるのである。それと同時に、応神天皇の母后としての働きを重視する『古事記』は、神功皇后を女王として取り扱っている『日本書紀』よりも、「慈母」「人間性」といった性格を濃厚に出そうとする傾向があったことも併せて指摘できよう。

5. 終わりに

以上の考察を通して、『古事記』の中巻に登場した三人の皇后は非常に類似している形象を持つことが察せられる。この類似点とえば、まずは、三人の皇后はともに巫女的な存在だということである。

前稿の考察で、巫女としての性格が『古事記』の上巻に登場した女性人物には色濃く存在していることが明らかになった。そして本稿で取り上げた三人の皇后においても、富登多々良伊須々岐比売命

の名義や神のお告げの歌、沙本毘売の名義と夢解き、神功皇后の帰神に関わる描写を通して、その巫女的性格が示されているのである。このことから、巫女的な性格は神代から人代にかけて、古代女性の根本的な性格の一つと看取でき、『古事記』の女性人物の基本的な性格とも言える。

ところが、これらの巫女的性格を持つ女性は、単に呪術を操ることができ、靈力を持つに止まらない。彼女達はその呪術力および靈力を用いて、周りにいる男性に大いに貢献したことも注目すべき点である。夫の大穴牟遲命に呪力の領巾を与えるなど、靈力を用いて夫を助けた須勢理比売が上巻の代表例であろう。中巻には富登多々良伊須々岐比売命が子に、沙本毘売が夫と兄に、神功皇后が子に対し、守ったり助けたりしていた記述が認められる。この点においても三人の皇后は共通しているが、『古事記』の上巻と中巻における女性人物の設定が一貫性を持つことも併せて指摘できよう。

しかし一方、中巻に登場する女性は、上巻の女性とは全く同一な形象を持つわけでもない。たとえば、『古事記』の上巻には大穴牟遲命の母である刺国若比売を除けば、母子の絆を描いたものが少ない。これに対して、中巻に登場した三人の皇后に関しては、富登多々良伊須々岐比売命と神功皇后はともに子を助けたり、沙本毘売は子のために名をつけたり、大湯坐・若湯坐を定めたとある。ここで、上巻の女性と異なり、中巻の女性人物には子への情愛が明白に示され、慈母・聖母としてのイメージが大いに強調されていることが認められる。

ただし、中巻にはほかに倭建命に関係している弟橘比売命と倭比売命、また本牟智和氣王が肥河で出会った肥長比売などの女性人物も登場したが、これらの女性については母子の話が出ない。このことから、三人の皇后に関わる母子の絆への描写は深い意味を持ち、このような描写を通して、「国母」として持つべき慈愛が示されていることが看取できよう。

また、三人の皇后の中で、富登多々良伊須々岐比売命と神功皇后

とは、ともに夫天皇の死後に子を危機から救い出し、夫死後の皇位の継承および国家の安寧には重要な役割を果たしているので、王権の安定を築く存在として認められる。この二人に対して、沙本毘売は夫を暗殺しなかったことによって、旧制度の崩壊および天皇統治の進展がさらに一段進むことになった。したがって、この皇后の存在は最終的に垂仁王権の発展にも肯定的な意義を持つことが考えられる。それと同時に、富登多々良伊須々岐比売命と神功皇后とは違って、沙本毘売の子は次期天皇にならなかったが、このような記し方によって、皇后の行動は自分の運命のみならず、子の運命に対しても大きな影響のあることが示されていていよう。さらに、皇后としては何をすべきか、何をしてはいけないかといった、皇后のありようも示唆されていていよう。ここにおいて、富登多々良伊須々岐比売命・神功皇后、沙本毘売、この三人の皇后は『古事記』の描こうとする皇后のあるべき姿を語ろうとすることで、表裏の関係となっていると見ることができるのではないか。

なお、三人の皇后に関しては、「患苦」や「不忍哀情」や「因疑人心」など、より人間的な描写も認められる。これらの描写からも、三人の皇后は神代の女性と比べてより人間的な存在として造形されていることが認められる。巫女的な性格や神子としての性格が強く描き出されている中でも、こうして人間性が示されているのは、『古事記』中巻のありようを考える時の論点の一つと成り得よう。

このように、『古事記』上巻の女性人物には、大地母神や始祖型など、多くの類型が認められるのに対して、中巻に登場した三人の皇后の形象は同質性が高いと言える。富登多々良伊須々岐比売命は神子として、沙本毘売は情の深い女性として、神功皇后は有能な軍事家・政治家として、三人の皇后の形象には各自の特殊性が認められる。ところが、時代・時勢の波に揺られながらも困難と立ち向かおうとする強い意志と勇気を持ち、能動的に周りにいる男性を守ろうとする、巫女的かつ慈母的性格を持つ女性の姿が一貫して表現されている。三人の皇后の形象は小差があるとしても、『古事記』におい

て非常に類似性の高い女性人物として捉えることができよう。

この三人の皇后の形象をさらに『日本書紀』に照らしてみれば、『古事記』の記述は非常に文芸的で、女性達の「人間味」が強調されているともいえよう。さらに、女性達は、身辺の男性に対しては深い愛情（男女の愛、肉親の愛）を持つ一方で、男性達の「治天下」の事業を支えていたのである。これらのことから、『日本書紀』と比べれば、『古事記』の女性の形象は非常にインパクトが強く、読者が共鳴しやすい性格を持っていると言えよう。さらに、この女性像の内部には、天皇統治という大きな命題が含まれており、女性人物を通して天皇統治の原理が一段と強調されているとも考えられるのである。ここからも、吉井巖氏が指摘した「古事記の作品的性格」²⁷としての意義が納得できよう。

テキスト

山口佳紀・神野志隆光校注・訳、『新編日本古典文学全集 1 — 古事記』、小学館、1997。

小島憲之ほか校注・訳 『新編日本古典文学全集 2 — 日本書紀』、東京、小学館、1994。

参考文献

相川宏、「常世攷」、『日本大学・芸術学部紀要』26号、1998。

青木周平、『古事記研究』、おうふう、1994。

石上堅、『日本民俗語大辞典』、桜楓社、1983。

金井清一「『古事記』の成立・構成に関する論考 I — 上・中・下巻の構成と意味」、『歴史読本』51巻12号、新人物往来社、2006。

神野志隆光、『古事記—天皇の世界の物語』、日本放送出版協会、1995。

倉野憲司、『古事記全註釈』第六巻、三省堂、1979。

²⁷吉井巖氏は「作品というのは、主題と目的に従って構成された言語表現の産物をいうのであって、この古事記が作品である…」と指摘している。【吉井巖「古事記の作品的性格について」『国文学解釈と教材—古事記と日本書紀—いま何か問題か』29巻11号、学灯社、1984】

- 西郷信綱、『古事記注釈』第三卷、平凡社、1988。
- 土橋寛、『古代歌謡全注釈 古事記編』、角川書店、1972。
- 鄭家瑜、「『古事記』に見られる女性像」、『政大日本研究』第五号、2008。
- 「『古事記』における大物主神伝説」、『台灣日本語文學報』第十七集、2002。
- 遠山一郎、「初代天皇像の構想」、『古事記研究大系 3—古事記の構想』、高科書店、1994
- 都倉義孝、「沙本毘売物語論」、『古事記 古代王権の語りの仕組み』、有精堂、1995。
- 永留久恵、『海神と天神—対馬の風土と神々』、白水社、1998。
- 能澤壽彦、「ヒメヒコ制の原型と他界観」、河野信子編『日本女性史 再考 I—女と男の時空』、藤原書店、1995。
- 浜田清次、「沙本毘売の物語について」、『日本文学研究』4号、1962。
- 前城直子、「古事記サホヒメ物語現存形の成立の背景（一）—記紀の比較を通して考察する」、『国士館短大紀要』第12巻、1987。
- 松村武雄、『日本神話の研究』第四巻、培風館、1958。
- 三浦佑之、『万葉びとの「家族」誌—律令国家成立の衝撃』、講談社、1996。
- 三谷栄一、「兄妹の恋—近親相姦からみた」、『国文学解釈と鑑賞』515号、至文堂、1975。
- 山崎正之、「叛乱物語の一位相—サホビコ・サホビメ物語を中心に」、『国文学研究』第58集、1976。（のちに土井清民編、『日本文学研究資料新集—1古事記 王権と語り』有精堂、1986 所収）
- 吉井巖、「古事記の作品的性格について」、『国文学解釈と教材—古事記と日本書紀—いま何か問題か』29巻11号、学灯社、1984。
- 吉田修作、「対馬の神功皇后伝承」、『福岡女学院大学大学院人文科学研究紀要』第四号、2007。